

平成 24 年 5 月 28 日現在

機関番号： 12603  
 研究種目： 基盤研究(B)  
 研究期間： 2007 年度 ~ 2010 年度  
 課題番号： 19401018  
 研究課題名（和文）  
 ゴジャール・ワヒー語圏の調査研究－文法分析・比較基礎語彙と民俗誌資料の採集・分析  
 研究課題名（英文）  
 Research on Gojal Wakhi -- Grammatical Analysis, Comparative Basic Vocabulary  
 and Ethnographic Studies  
 研究代表者 吉枝 聡子 (YOSHIE Satoko)  
 東京外国語大学大学院総合国際学研究院・准教授  
 研究者番号： 20313273

## 研究成果の概要（和文）：

(1)ゴジャール・ワヒー語の民話テキストを収集し、文法分析を行った。このうち、現地に残る代表的な婚礼歌 Sinisay についてはテキストを出版した。これ以外の分析作業済みの民話については、出版およびウェブサイトにおける発表の準備作業中である。

(2)動詞組織を中心に文法分析を行い、全体的な動詞体系、および、能格構文とそのバリエーションについて、論文として報告した。

(3)地域特有の民俗関連語彙、および、ゴジャール地域におけるワヒー系全村落に観察される微地名を含む、11,000 超の語彙を収集し、今後の出版準備作業として、インフォーマントによる逐語チェックを行った。

## 研究成果の概要（英文）：

(1)The folkloric texts of Gojal Wakhi were collected and linguistically analyzed. Out of those texts collected, the wedding song named 'Sinisay', a representative traditional one was published with a translation and ethno-linguistic notes. The remaining texts are to be made available either in a printed form or on website.

(2)The Gojal Wakhi grammatical system, the verbal one among others, was examined and analyzed. The paper concerning the 'ergative' construction and its variations was published. Gojal Wakhi proved to be in process of 'ergativity' decay and the probable drive mechanism of this tendency was clarified.

(3)Over 11,000 words, around 3,000 place names/micro-place names of the whole Gojal Wakhi area included, were so far gathered; ethnographical data were especially well covered. All the items were re-checked by two informants. However, some items of which meaning was lost remained to be confirmed.

## 交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	1,700,000	510,000	2,210,000
2008 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2009 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2010 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
総計	5,100,000	1,530,000	6,630,000

研究分野：言語学，イラン諸語

科研費の分科・細目：言語学－言語学

キーワード：イラン語派，パミール諸語，ワヒー語，フンザ，ゴジャール

## 1. 研究開始当初の背景

ワヒー語は、イラン語派パミール諸語に属し、アフガニスタン、タジキスタン、中国新疆ウイグル自治区、パキスタン・ゴジャール（上部フンザ）地方に分布し、パミール諸語の中で最大の話者数（推定2万人）を有する。

本研究の調査対象地であるパキスタン北部のゴジャール地方は、1974年のパキスタン併合時まで事実上の自治が認められていた、フンザ藩主国の一部であった。高度7000mを越す峻嶒な山岳地帯に囲まれ、地理的に孤立したこの地方は、1978年のカラコラム・ハイウェイ開通までは、名だたる辺境であった。このため本地域では、伝統的な生業・社会形態、民族・民俗誌資料、言語面では古形を残す文法形態・語彙が、豊富に残されている。

藩主国の中心地フンザ（ゴジャール地方の南方に位置する）では、その言語ブルシャスキー語が孤立言語として著名であったこともあり、カラコラム・ハイウェイ開通以降、多くの研究者により報告が行われてきた。このフンザ調査ブームの影で、隣接言語であるゴジャール・ワヒー語とその文化は、D.L.R. Lorimer（私家版1958年出版、調査は1935年）以降、しかるべき調査研究の対象となつてこなかった。

しかしながら、カラコラム・ハイウェイの開通は、ゴジャール地域の社会・経済形態に急速な変化をもたらしている。特に、新たな換金作物ジャガイモの本格的な導入により、農事暦の変化とそれによる祭礼の廃止、経済形態の劇的な変化等が生じるにいたつた。また、近代的教育を重視するイスマール派系財団からの開発援助は、伝統的習俗の消失や若年層の流出を引き起こすなど、あらゆる面で伝統的な生業形態が失われつつある。

このような事態を受け、現地の人々は、経済・生活・教育レベルの向上を享受する一方で、自分たちの言語を含む伝統文化が急速に失われていくことに強い危機感を共有している。ことに教育関係者は、現地の伝統・

文化を記録・保持することの必要性を十分に認識しており、現地のアイデンティティの象徴であるゴジャール・ワヒー語に関しては、1)無文字言語であるワヒー語の正書法の確定、2)文法執筆、3)辞書編纂、の強い要望を持っている。研究代表者は、H16年度からH18年度にかけて科研費（若手研究B「ゴジャール・ワヒー語の調査研究—基礎語彙および民俗・民族誌資料の収集と分析」No.16720084）による言語調査を行い、基礎語彙収集と、ラテン・アルファベット中心で処理できる暫定的な正書法（2005年にウェブサイト上で公開済み）を確定した。しかしながら、後2者の要望には、応えるにいたっていなかった。

## 2. 研究の目的

以上の背景から、本研究は、以下の3点を主な研究目的および研究計画とした。

- (1)ゴジャール・ワヒー語に関し、民話・民族誌に関する言語テキストを収集し、文法分析作業を行う。
- (2)当該語圏全域をカバーする基礎語彙を採集し、包括的な基礎語彙集を作成する。
- (3)当該語圏における民俗・伝統儀礼の記録収集とその分析を行う。

## 3. 研究の方法

パキスタン北部・ゴジャール（上部フンザ地方）地域を調査地域とし、特に言語テキストの収集に関わるインフォーマント調査に関しては、主要3村落であるグルミット・シスーニー・パサーを対象とする。

語彙調査に関しては、必要に応じて、上記の主要3村落の北方に位置する、チャプルサン地域（アフガニスタン国境付近）、および東方に孤絶したシムシャル地域でも現地調査を実施し、それぞれの地域に特徴的な語彙を中心に収集作業を行う。

### (1)基礎語彙集の作成

H 18 年度までに収集済みである基礎語彙に、現地のエコロジー、社会・文化・経済形態等にかかわる、地域特有の語彙を補充する形で進める。平行して、ワヒー語話者の移住経路の確定に重要な、地名の採集・分析を行う。また、女性の通過儀礼・産育用語に関連する語彙を採集する。

### (2) 民話・民族誌・史譚の収集

現地の伝承者から、民話・民族誌・史譚等の言語テキストを収集する。また、当該語圏における民俗・伝統儀礼についても、聞き取り調査と記録収集を行う。

### (3)文法分析

上記(2)で得られた言語テキスト、および、インフォーマント作業から採集した会話・談話を含む文例を対象として、同言語に関する文法分析を行う。特に、動詞組織、能格構文、パミール諸語特有の現象である、いわゆる'Moving Particles', 方向・上下・場所を表す前置詞・後置詞、副詞構文、指示代名詞を、主要な考察対象とする。

## 4. 研究成果

### (1)基礎語彙について

H19 年度の現地調査では、アフガニスタン国境付近のチャプルサン地域、およびシムシャール地域を含む全 25 村落を实地調査し、各村落における微地名および、地域関連語彙を収集した。

またシムシャール地域に関しては、H20 年度に、夏期高地ヤク放牧に関する調査を併せて行い、関連語彙を収集した。

上記のデータを含め、H21 年度までには、11,000 語超の語彙が収集済みとなった。これらの語彙には、すでにウェブサイトにおいて音声付きテキストを公開している基礎語彙 1000 語に加え、現地のエコロジー、民俗、伝統的村落形態、農業牧畜、イスマイリー派、産育語彙等に関連する、地域特有語彙などが含まれる。

なお、これらの収集済み語彙については、H21・23 年度の現地調査においてインフォー

マントの協力を得て、逐語チェックを行った。しかしながら、社会・生活形態等の変化によりその意味が失われた単語については、さらなる再確認を要することとなった。

### (2)言語テキストの収集および文法分析

H21 年度までに、対象言語の中心村落であるグルミット村を中心に、民話テキストを収集し、一部については発表済みである(下記 5.), 残り数点のテキストについても、文法分析作業は終了しており、現在、出版またはワヒー語ウェブサイトにおける音声・解説付きテキストの形で提供する準備を進めている。

文法分析に関しては、特に、動詞体系および能格構文の分析を中心として作業を進めてきた。このうち、能格構文(および Moving Particles の影響)については、以下のような現象が認められた(発表論文については下記 5.参照):

ワヒー語を含むイラン系言語では、伝統的に、現在時制では主格・能格構文、過去および完了時制では能格構文をとる、いわゆる分裂能格が見られる。

タジク共和国に分布するタジク・ワヒー語では、既に能格構文から完全に主格・対格構文に移行しているペルシア語の影響を強く受けた結果、能格構文は失われ、同じく主格・対格構文を取ることが確認されている。

しかしながら、ペルシア語の影響が少ないゴジャール・ワヒー語では、現在でも分裂能格が保たれており、自動詞の主語(S)、他動詞の主語(A)、他動詞の目的語(P)がそれぞれ、主格、斜格 I、斜格 II という異なった形で用いられる、いわゆる double oblique と呼ばれる格表示構造をもつことが確認された。ちなみに、斜格 I は、現在時制における直接目的語および過去時制における他動詞の動作主(A)、斜格 II は過去時制の他動詞における被動作主(P)を専用的に表す格である。通常ワヒー語では、過去時制では、A は斜格 I、P は斜格 II に立ち、動詞は人称語尾を伴わない過去語幹(完了時制では完了語幹)によって表される。このような格表示構造は、類型論的には、かなり希な構造であるといえる。

しかしながら、上記の「正しい」能格構文がゴジャール・ワヒー語話者間でお互に認識されている一方で、その実際の使用状況をみると、能格性に一種の「ゆれ」が存在する現状を見て取ることができる。この「ゆれ」は、①斜格語尾の不安定さによる斜格 I/II の混乱、②いわゆる **Moving Particles** を用いた短縮形が示す論理焦点の変化、の2点にみられるバリエーションにおいて現れる。

①は、斜格 I (語尾形) における-e の脱落、斜格 II (無語尾形) への余分な-e の付加、の両面で認められる。

②は、パミール諸語に特有の、いわゆる **Moving Particles** の機能が大きく影響したものと見てよい。**Moving Particles** とは、古くはイラン諸語の接尾辞形人称代名詞に起源をもつもので、多彩な機能を持ちながら、文中で移動することができる(多くの場合は文の最初の主要要素に接続する)ことが大きな特徴である。**Moving Particles** は現在時制/過去時制の両方で用いられるが、現在形ではコピュラとして用いられる一方で、他動詞文の過去時制では、能格構文の A(=斜格 I)が省略された場合に、これに代わって A を標示することができる。

この場合、斜格 I に立つ論理主語と **Moving Particles** の出現は相補的であり、**Moving Particles** が現れる場合には、斜格 I に立つ動作主は隠れてしまう。また、**Moving Particles** は、前述のように接続する要素に制限がないため、単語の重複が避けられる会話文中などでは、副詞や目的語が省略され、最終的には動詞語幹に接続する短縮形が用いられるようになる。このような短縮形は、内的には能格構文を保ちながら、外見上は、いわば擬似的な主格-対格型をとっているように見える。

以上のような能格構文上のバリエーションに見られるような、斜格 I と斜格 II の曖昧性が増し、格の別が希薄になることと同時に、**Moving Particles** による擬似的な主格・対格構文による論理主語の表示が優勢になるという傾向は、とりもなおさず、ゴジャール・ワヒー語における能格が極めて微妙な変化の過程におかれていることを示唆する

ということができる。これらの状況がさらに進み、過去時制でも動作主に論理上の焦点があたるのが優勢になった場合、統合した斜格が現在時制のみならず過去時制においても対格的に働くようになり、結果的に、ゴジャール・ワヒー語の分裂能格が、タジク・ワヒー語が辿ったように、次第に主格・対格構文へと移行していく可能性が十分予測できる。この変化は、パミール諸語およびイラン語派のみならず、格表示構造や能格構文に関わる類型論的に見ても、極めて興味深い現象であり、今後も引き続き注意深く観察していくことが必要である。

### (3) 民俗・伝統儀礼の記録収集とその分析

H19・20 年度に、伝統的な大麦・小麦栽培の関連用語および関連行事について、現地の長老から聞き取り調査を行った。さらに、近年導入されたジャガイモ栽培の現状についても調査し、関連用語を収集した。また、上述のシムシャール地域における現地調査では、他のワヒー系村落では既に失われている、高地ヤク飼育に関する飼育形態に関する聞き取り調査を行った。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計6件)

① 吉枝聡子 「ペルシア語のモダリティ」『語学研究所論集』 No. 16, 2011/6, 東京外国語大学語学研究所, pp. 210-6. 査読有.

② 吉枝聡子 「ペルシア語のアスペクト」『語学研究所論集』 No. 15, 2010/5, 東京外国語大学語学研究所, pp. 355-9. 査読有.

③ 吉枝聡子 「ペルシア語の受動表現」『語学研究所論集』 No. 14, 2009/3, 東京外国語大学語学研究所, pp. 228-30. 査読有.

④ 吉枝聡子 「ゴジャール・ワヒー語の能格構

文』『東京外国語大学論集』No.78, 東京外国語大学, pp.273-88, 2009/7, 査読有.

⑤吉枝聡子「ゴジャール・ワヒー語の動詞体系」『東京外国語大学論集』No.76, 東京外国語大学, pp.35-62. 2008/7, 査読有.

⑥吉枝聡子「ワヒー語婚礼歌 Sinisay」『語学研究所論集』No.12, 東京外国語大学語学研究所, 2007/3, pp.101-18, 査読有.

〔図書〕(計4件)

①吉枝聡子『ペルシア語文法ハンドブック』白水社, 2011/6, 295pp.

②吉枝聡子「イラン語の世界」『朝倉世界地理講座—大地と人間の物語—西アジア』後藤明他編, 朝倉書店, 2010/9, pp. 313-320.

③吉枝聡子「ペルシア語の辞書」『世界のこ とば辞典・辞書の辞典・アジア編』石井米雄編, 三省堂, 2010/8, pp. 310-32.

④吉枝聡子「アフガニスタンの言語事情」『アフガニスタンと周辺国』鈴木均編, アジア経済研究所, 2008/7, pp.201-10.

〔その他〕

(講演)

①吉枝聡子, 上岡弘二「ワヒーの人びとの信仰とくらし」アフガン研究ネットワーク, 2008/1/15.

(ワヒー語ウェブサイト)

[http://www.coelang.tufs.ac.jp/multilingual\\_corpus/wakhi/](http://www.coelang.tufs.ac.jp/multilingual_corpus/wakhi/)

(ゴジャール・ワヒー語基礎語彙約 1000 語を音声つきで公開)

## 6. 研究組織

### (1)研究代表者

吉枝 聡子 (YOSHIE Satoko)

東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・准教授

研究者番号 : 20313273